

幼な心へのお話について

大塚 喜 一

一、お話の中の童心の動きに

共感し共鳴せよ

日本幼稚園協會編纂の「幼兒の樂しむお話」は、その序文の中に「このお話は、お茶の水幼稚園でお話をされてゐる間に、實際幼兒を樂しませる事の出來たものを集めたのである。」と記されてゐる。然るに其中のいくつかのお話は、初めて讀者をして、何だかたよりない様な物足りない様な感^を起させる事がある。明日は子供たちへお話をするといふ喜ばしい希望の中にも何となく不安と責任感を抱きつゝお話を讀んでゐる時、若し斯様な感を起すならばそれは、お話の中の童心の

動き——例へば無邪氣な喜び、好奇心的な軽い驚き、リズムの快味等——に充分に共鳴する事が出來ないからで、斯かる味を味はずに只一寸讀んだだけの記憶を思ひ出しながら話したのでは、折角の好き話材も其効果の大半を失ふであらう。然らば、どうすれば斯かる童心の動きに共鳴する事が出來るかといふに、常に幼兒と共に遊ぶ間にこまやかな同情を以て彼等と精神生活を共にする事、殊に幼兒から話しかける個人的な對話を心をこめて聴きつゝその中に動く幼な心に共鳴するやうに心がけるべきである。幼稚園の朝の時間は實に斯うした人間的相互生活をなすべき絶好の機會であ

つて、その日の保育の生命はこゝに其源を發してゐる。幼兒達は、毎日新しく地上に生れて來た様な新鮮な潑刺たる感觸を以て其感覺に入り來る萬象に直接してゐる。幼な心に話しかけんとする者はこうたした幼兒の態度から學ぶところが無ければならぬ。日本童話聯盟主事松美先生は「見るものきくものからお話が湧く」といふやうになつてこそ、始めて幼稚園の先生である、低學年の先生である。可愛い、子供の母親である「話方研究第四卷第四號」と云つてゐられるが、幼兒の如き心を以て環境に接するならば、お話の材料は自然に潤澤に我等の心に入り來るであらう。

二、幼兒の好きなお話を

何回も繰返して話せ

倉橋先生は「幼稚園に於けるお話の目的は幼兒をして幼兒の世界に住ましめる事である。」と云はれた。前に述べたる如き童心の動きがお話によつ

て呼び起された時、幼兒達は己が魂の故郷（ユートピア）に遊ぶ樂しさを味ふ。一度此の樂しさを味へば、其後此お話は幼兒の心に抱く大切な寶となり、幼兒は其お話をした先生に再三再四之を聽かせて呉れとせがむやうになる。此際幼兒の要求する所は、最初に保姆の心の中から流れ出て幼兒の世界を展開させた「お話」そのものであつて、決して書物に書かれた「童話」ではない事を特に注意すべきである。幼兒達は初めて此お話を耳を傾けた時の感激を再び新しく味ひたいと願つてゐるのであるから、話す者は最初のお話の時の心持と之に伴ふ音聲態度等を再び生かして話すべきである。詳しく云へば、話す者はお話の中の一々の光景を一回毎に次第に鮮明に自己の心眼に映せしめ、且是等の中のいゝな心の働き殊に情緒の動きを一回毎に益々如實に眞劍に自己の心の動きとして實感しつゝ話して行くのである。お話の音

聲や態度等は實にこうした内面的理解の中から自然に産み出さるべきものであつて。上品な單純な態度の特質はお話を自己のものにした努力によつて得られる。同じ童話が斯くして一回毎に洗練せられたる「お話」として進展して行くのであつて、此處に幼兒と保姆とが互に心の握手を交して進み行く境地が開かれて來るのである。前述の

過程を経て反復精練せられたるお話に於ては、其光景の映像と其情緒の躍動とは話者の心に動くと共に幼兒の心にも動き、兩者の共感共鳴の斯くして熟する時、話す事と聽く事とに相互に全我を没入し來りて、此處に兩者の相對的な差別が「お話」そのものの中に融合せられて此處に自他の人格を合一せる絶對境に入る。其深淺の度は時と處と人とに依て異なるであらうが、眞劍な努力によつて達し得らるべき境地である。此三昧の妙境より我に歸りて靜に内觀し反省すれば、自分と共にお話の

世界に遊んだ幼き魂の姿が鮮明に自己の心に映じて來る。自分の努力の足らざるに比し、幼な心が何と熱心にお話に聽き入つてゐることよ！自分にお話を求めてゐる幼兒の純眞な信賴性に感激する時、絶えず斯道に精進せずには居られない内なる心の力を與へられるのである。

結語 人間教育としてのおはなし

幼兒の世界に現はるゝ人間的な又は人間としての生活感が即ち「幼な心へのお話」を形成するのであらうと思はれる。幼兒は人間を求めてゐる。人間を方便として道具としてではなく、あらゆる功利心を離れて直接の人間交渉を求めてゐる。故に、親や先生と幼兒との相互生活の中から開けて來る人間交渉は保育の最も純なるものであらうが、只我々が大人であるが爲に幼兒の心にピツタリと來ない所のあるものも亦止むを得ない事かも知れぬ。幼兒は「お母さん」や「先生」その人に大

間交渉を求めて來るが、大人としての心の働きの或る方面が（時としては、教育の名に於て我々が幼兒に對するが爲に働く心の或る方面が）この元來が純眞自然なるべき人間交渉の情景の中に幼兒の心に通じ難く解され難き何ものかを混入させはすまいか？さりとて専門的な上手なお話は、お話しそのものを樂しみ得るが、それは或特殊な珍らしい心の御馳走として折々味ふべきものであつて、人間味に於ては却て薄い憾がある。茲に於てか、幼兒が人間交渉を求めてゐる保姆その人が、幼兒の世界の言葉と態度とを以て彼等に話しかけて來た時、幼兒達はどんなに喜ぶであらうか。これこそ正しく、お話と人間性との兩方面の要求を一體として心ゆくまで満して呉れる幼な心の滋味である。更に切言すれば、幼兒の人間性をその知情意未分の具體生活に於て、即ち人間への内熟を其本源に於て培ふべき心の糧として「幼な心へのお話」

が爲されるべきである。基本教育の此見地から吾人は大切な原則を學ばねばならぬ。お話の構成要素として體驗的なるものを撰ぶべき事、發音の正確なると共に完全なる感情の表現を伴はせるべき事等は其代表的なるものである。（詳細は日本童話聯盟發行話方研究第四卷第一、二號に就て知られたい）斯く考へ來れば、初に「童心の動き」として述べたる所にこそ、人間教育の尊き素材が吾人に教へつゝ吾人に培育さるゝを待つてゐる事に思ひ到るのである。お話といふ保育の方法を用ひつゝも、其方法を産みし原理に立脚し其精神を生かして、幼な心と共に動きつゝその生育する本源に於て人間本然の自己を見出す。これこそ幼な心にお話する者の最も眞摯なる態度であつて、保姆と幼兒とが親しき心の握手を交して人間教育の眞實性に生くるの道も亦斯くして開かれて來るのであらう。

二月號「保育といふこと」誤字訂正

頁	段	行目	誤	正
三四	下	八	持徴	特徴
三七	上	一三	現像	想像
同	下	六	具體的に	具體的な

同上参照事項

處女の母性愛について

of Stanley Hall, Adolescence (スタンレー、

ホール原著、元良博士外三氏譯青年期の研究六五
三頁)に曰く「アウグスチン Augustin 氏が「人の
靈魂は神のために作らるゝものにして、神の中に
安息を發見する迄は幸福なる事能はず」と云へる
が如く婦人の身體と精神とは母たることのために
作られたるものにして、母たる事能はざれば到底
眞の安息を得る事能はず。吾人が婦人の精神に就
て理解するに隨ふて漸く明白に、婦人の精神は意
識的又は無意識的に此方向に向へる事を知るべ

し。婦人の性質は先づ愛の對象として兒童を要求
するものにして、次で彼等をして此職分を履行せ
しむる爲、彼等に元氣と保護とを與ふる男子を要
求するものなり。此二つの者は婦人の生活を完全
にするものにして、是無かりせば其生活は到底圓
滿なる事能はず、其運命も亦其奥底に於て多少の
缺陷を免れざるべし。凡て成熟せる健康なる女ら
しき女は必ずや上述のものを要求すべく、是を得
る事遅き者は遂に臍を噛むの悔を残すべし。是無
くんば完全なる幸福は到底生ずるに由なく、其他
の満足は畢竟空想に過ぎず。故に理想的社會にあ
りては婦人の教育は良妻賢母を中心とせざるべか
らず」と。

母となつた最初の日から母たることの尊き使命
を全うして天與の惠福を享受せんとせば、母とな
る前の生活即ち處女時代の生活が、ホール氏の云
へる如き純真健實なるものでなければならぬ。